

構想に重点を置いた作文指導の一事例

土 田 祥 三

「……一般に優秀な作品が取り上げられて、それが中心に指導が行なわれているのではなからうか……。中以下の生徒がもっている力をせいぜいばいに発揮して、人にわかるように書かせるにはどうしたらよいか……。」(県教委発行の中学校教育課
研究協議資料冊36から)とあるように、書けない生徒に、何をどう書かせるかは真に第一義の問題である。が同時に書ける生徒が、書かずじまいにならぬよう、その芽を発見してやり、育て伸ばしてやる、つまりせいぜいばい書かせるということも重要なことである。

以上の立場で、こゝでは後者の一指導事例を、特に構想に注意しながらとりあげてみる。

作文も樹木と同じように、豊かな土壌に匹敵する環境や経験がたいせつであり、さらに愛情のこもった手入れ、すなわち丹念な添削、推考、助言を必要とする。

あるていど人にも読んでもらえる文章を書く力を育てるためには基礎的条件を整えてやる必要がある。文章が生まれる基底には作者の素質・生育歴・家庭環境・経験・表現能力等の諸条件が働くがそれらのひとつひとつについて、指導者は正しい認識を持ち文章力を高める契機や要点をとらえることが大切である。

また直接に作品に対しては、主題や構想や表現等の諸角度からじゅうぶんに推考・添削をほどこすことが主要である。

ところで「何を書いているかわからない」と訴える生徒は、作文の第一歩である取材の態度や視点が定まっていないものと考えてよい。また構想力の貧困を示すものでもある。前掲研究協議資料の中にも、作文の取材のし方について、教科書・読書・特活・諸行事等をあげているが、私たちが同協議会に参加するため、その趣旨に沿ってとりあえず平素考えていることがらをまとめたことがある。しかし、比較してみると大同小異の箇所も散見され、ともかく協議会資料の方がより詳しく系統的でもあるので、その内容をこゝでは示さない。また、現場では、推考、添削まではとりの手が回らず、基礎的な取材のあたりで低迷している場合が、実際にはかなり多いわけであるが、このたびは、初めに述べた立場で、また、作品もその指導も、決してよかったといい得るものもないがその実践過程の概要を記すことにする。

私が国語を受け持っている2年生の布川幸平に何か書かせてみようと思ったのは彼の作文力と家庭環境にあるが、作品の背景を明らかにする一助としてしばらく彼の学力や人がら、家族のことにふれてみる。

知能指数125、平素の成績クラス内で2、3番、学年(900余名)では4、50番、教科の中では保健体育が評定4で、あとは5(8年時)、社会・国語・英語が好き。学級委員に選ばれること3回(半年交替)、生徒会役員の選挙では有力な候補者となったこともある。クラブ活動では、1年時は柔道クラブ、2年3年と演劇クラブにはいり三年時には部長に推された。性格テストの社会性に関する自己評価によってみても、大勢の中でもよくしゃべられるとか、友人が大勢いるとか、仲間に入気があるとかいりいくつかの項目に十(プラス)の反応を示し、判定は上となっている。自分では指導者になるのは好きでないと言っているが、正義感あり、積極的でよく弁も立つので、多少敵もいるが、常にクラスの中心的人物である。教室で時々騒いでいることもあるが、教師の指

導に対しては極めてすなおで、態度も少年らしくはきはきしている。要領のいい男だとも言われながら、好感の多分に持たれる生徒である。

家族は次のとおり。祖父（74歳 会社重役）、祖母（71歳）、父（42歳 洋品雑貨小売業）母（40歳）、兄（19歳 高校生）、妹（13歳 小学生）。母は後妻。実母は小学3年時死亡、私は彼の兄の中学2年当時一か年受け持ち、その時から祖母をよく知っていた。祖母は父兄会に必ず出席した。頼まれればP.T.Aや母の会の役員も喜んで引き受けてくれ、会合には労力・時間をいとわず顔を見せる。律義は、また孫に対する情愛のいかにもこまやかな老婦人といった感じになにかしら心を打たれるものを感じていた。ぜひ一度こういうおばあさんを文章によって浮き彫りにしてみたい、しかも愛する彼女の孫の筆で……と念じていたのである。

布川の表現力。注目をひいた作文は8年生の修学旅行記である。

「横浜港」の一部分を載せる。

海だ、港だ、こゝが横浜だ。そしてこゝが日本の海の玄関だ。ぼくにとって海や港はそう珍しいものではない。しかし、海と港が一つになっているのを見るのは初めてである。

（中略） 大きな船がこゝに泊まり、こゝに休憩する。それにつれて多くの人と貨物が運びこまれ、運び出される。その休まない活動が港の生命だろう。そしてそのたゆみない航海が港の血管だろう。また、それを織りなす人々は港の細胞だろう。

ぼくの見る横浜港は、とてつもなくでっかい、どついやつだ。だが、この血管その細胞が一しゅんでもその活動を止めることがあったらこのどついやつもひとたまりもなくずれてしまうにちがいない。

（中略） しかし、海は静かだ。その船たちにやさしく子守り歌をきかせているようにかもめがとんでいる。

ぼくはこの横浜で、雄々しくしかも静かな太平洋を思う存分ながめることができ満足した。

（以下略）

推考や表現等、ふじゅうぶんな点もあるが、とにかく簡にして要を得たといえる、また比喩も巧みにして迫力あり、意欲もじゅうぶん感じとれる文といえよう。受け持った生徒の200編余の作文の多くは、たいていの場合そうであるように没個性的な、また全然迫るものを感じさせないものであった。そうしたなかで、布川のこの作文は、いわば手ごたえのある文章であった。

文章に表われる布川の迫力は以前からあったものと思われる。最近小学校6年時代の文集を見せてもらった。

題は『ぼくのゆめ』副題がついていて、『空（パイロット）』となっている。

（前文略）ぼくは、一度母を病気でさらわれたということと、どうして、8年ばかり前までは、戦争でけがをした人や、悲惨な病人をたすけるために医者になろうと考えたことがある。

しかしいまはちがう。そんなあまいかんがえはいけな。そんなことより、戦争つまり争いをやめさせるために力をそそぐべきだと考えた。

結論をいそげば、パイロットになろうということだ。前にも書いたとおりに、戦争をやめさせ

るためには、戦争をやる人の身になってみたいのだ。むかしでいうなら帝国軍人、今でいうなら自衛隊員だ。

ぼくは、試験でむずかしい問題にぶつくと空を見る。もちろん、答を空がおしえてはくれない。しかし希望がわくんだ。

こんなことを書くと、きっとみんなは、でたらめ病だとわらうだろう。でも真実なんだ。

父は陸軍上等兵、ビルマの空しゅうで死んだおじは海軍軍曹、そしてぼくは自衛隊空軍のパイロットだ。これが、ぼくの最高の、そしてまちがいのないゆめだ。(終)

論法はいかにも子供っぽいところがあるが、そうした論旨うんぬんよりも、むしろ、文全体にみえざる迫力・活力は、「だ」調の文体からくるところかもしれないが、いかにも布川らしく魅力も感じられる。

「私の祖父母」を書かせようと私を思い立たせたのは、さきの「横浜港」の文であったが、こうした彼の作品を遡って読んでみても、表現力、表現意欲はかなり強く、個性的なものを持っているということがうかがわれる。

わりあい、内向的な人間が文を書く、ともいわれているが、布川の場合、ぴったりとはあてはまらない。性格の分析評価にも見られるようにどちらかといえば外向的な人間だ。しかし外向的ってんばりではない。そこに「書くべきもの(内容)」と「書かんとするもの(意欲)」が一体となった布川を考えることができる。しかも、母の死・祖父母の愛情というやゝ特異な環境の中におかれた結果ますます彼にとって、筆をとるには条件がよくそろっていたといえる。

○第1回めの話合い(動機づけ)

7月中旬、学期末試験も終了したある日。

布川を教務室へ呼び、何か書くことはないかと話をきりだす。急なせいかわつになにもありませんと答える。今までのおもな経験、修学旅行の作文のでき、作文コンクールのこと等話を続ける。祖母を中心とした家庭環境から取材することは彼の口から言い出してもらいたかったが、なかなか思うように進まずこちらから水を向ける。おばあちゃんのことを中心にして書いてみたらどうか。きみもだいぶかわいがられているし、おばあちゃんにしてみればまた店をかまえる苦心とか、子供さん、きみのおかあさんを失った悲しみ、きみたちによせる期待とかいろいろ書く材料はあるのではないか。きみもひとつ恩返しといってはおおげさかもしれないが、少年時代の一記録を作成しておくといった意味で書きまとめておくことも決してむだなことだとは思えないが……。きみも書きづらい気持ちもあるだろう。なくなったおかあさんを思い出したり、またおばあさんに思い出させるということは、私としても忍びない気もする。しかし、そういうひとつの運命は運命としてしっかり受けとめ、じっくり自分の境遇を見つめ、それを土台としてさらに飛躍する機会をとらえる、ということもたいせつではないかな……。こんな話合いで布川にもなんとか書けそうな、また、書いてみたいような気持ちが生ずる。7月中に草稿を持ってくる約束で教務室を出る。

○第2回めの話合い(1回めの添削)

8月下旬、川開きも終わったある日

7月中に草稿を提出してもらはずだったのが約一か月延びた。原稿用紙5枚程度でわりあい短い。

構想については、ほとんど話し合っていない。とにかく、本人の力量に応じて自由になんでも書かせたりえて、書き出しや話の筋、その山をどうするかなどを考えていきたいと思った。

草稿を読んで感じたこと——。

暑いさなかであり、期日も補習などで思うようにはいかなかったのであろうが、表現が観念的で、具体性に乏しくきめがあらっぽい。そのために、できるだけ、会話を入れること、描写を綿密にすること、心理描写も忘れぬこと等の注意が必要。

構想が単純だ。時間的配列になっている。特に書き出しのくふうが不足。書き出しはむずかしいが、その内容にもまさるくらい重要なものと思う。したがって、読んでもらおうとするには、まず書き出しに意を用いなければならぬ。

一般的に肉付けが貧弱、布川のひごろの迫力が表れていない。古町の大正時代の情調、祖母は美人だったと聞いているが、そういうエピソードなどはどう表わすか、引用すべき文章はないか等々。とにかく次に掲げた草稿をなん回も読み返し大要をばあくし構想を考え、同時に注を入れる。

私の祖父母 布川幸平

町を具体的に描け 場所を正確に表わした方が真実感がにじむ

①大正12年、つまり関東大震災の年の5月。まだいなか町の新潟の一角に、洋品店ののれんをどこの？ 固有名詞もはつまり出した方がよいさげたのです。この店をもつ前の祖父は、たばこやの弟子をし、マッチ、石けんのおろし売りをし、祭には、たばこを売って歩いたのです。祖父は、大きな店から木箱を買ってあるき、魚市場でそれを魚づめ用に売りました。まったく今考えるととてもできないようなことを祖父はやったのでした。先例に、もつと具体的にこんな貧しい生活をしてた祖父は、よく人に笑われ、会話を入れよばかにされました。しかしそんな時祖父は、こう考えたのだそうです。いま人はおれを笑う。だがいつかきっとあいつを笑ってやる、と。

そういう気持ちで何年間くらいか毎月毎日いっしょうけんめい働いた祖父を私は一生涯誇りと思います。とうてい私にはできないことを祖父はじっとこらえとおしてきたのです。観念的なことばをできるだけ避け、具体的事実を示すこと実にりっぱだと思えます。

さて、新潟のまちに店をもった祖父と祖母は、そこでまた仕事と四つに取組んだのです。大正12年では、まだデパートもなかったので、二人は自分たちが働けば働くほどその報酬の大きいことだいたいな場面だ、稀密に書き、努力やくふうしたことなどもつとたくさん入れてを知り、がむししゃらに働きました。当時道路は舗装もされておらず、外燈もなく、まったく夜は暗い町でした。そこで二人は知恵をしぼり、ない金をはたいて、翌年13年8月に、1千燭光の電燈を店の前につるして、上からも下からもこゝに“布川洋品店あり。”とわかったものだそうです。表現くふうせよ、また、その結果店の売り上げぐあいなども書いたらどうかまた、電燈といっしょに赤地に白のそめぬきの旗も店の前にかかげました。これには“最も買いい、親切第一。”と書いてあったそうです。こうした努力が二人によって毎月くりかえされ、いまの2人をさぎいていったのです。2人はよく徹夜で翌日の売り物の値段つけをしたそうです。暑い夏の夜はやぶれうちわで蚊を追いながら、また、寒い冬の夜は凍えた手を火鉢であったためながら2人ではげまし合い、力づけあったその生活こそ、もっとも幸福にちがひなかったと思います。2人は常に助け合い、自分たちの手で掲げた“布川”ののれんをしっかりと守りとおしてきたのです。この功績こそ、私が最も尊重すべきものと信じています。

②しかし、二人の人生はあくまでも幸福ばかりだったわけではありません。二人には長女すなわち私の母と次女、それに末の長男の三人の子供がいました。それが、末の長男が昭和20年1月2日、フィリピンで軍人として、一命を失ってしまいました。

祖母の様子がぜんぜん出ていないが、どうした

祖母の話では、祖父はその死亡の通知のあった晩、気が狂ったように泣きじゃくったといひます。

たったひとりのあととりむすこを失い、祖父はきつと悲しくて悲しくてしかたなかったのでしょう。

その日から祖父は、私の母つまり長女に、『布川』ののれんを守ってくれることを期待したのです、ところが、六年前の2月20日、母は胃ガンのため、私たち三人きょうだいと両親をおいて世を去ったのです。

よくよく二人は子供に縁がなかったのでしょう。三人の子供のうち、二人も死別し、一人の残った次女も結婚し、別な家庭の主婦となったのですから、人に残されたものは、孫の私たち人きょうだいだけになったわけです。

③しかし、このような大きな悲しみを受けた二人は実にふしぎに思われるくらい元気です。

いままで、私の祖父母に初めて会った人で、一度で二人の年令を言いあてたひとは1人もいません。この私でさえ、時々この二人がもう70の坂も越えている老人には見えません。なぜなら2人ともひどく元気で、腰も全々曲っていませんし、杖をついて歩く必要もありません。祖父は耳こそとなくなりかかっていますが、眼鏡はまだたまに使うくらいで、視力はおとろえていないといっどんなことがあつたか、具体的!ていくくらいです。祖母は眼鏡とそかけますが、耳はよく、私が聞きもらしたことがあれば、同席している祖母に聞けばよくわかります。こんなぐあいには、二人はたいへんじょうぶでめったに身体をこわしません。

祖父は毎朝、牛乳1本とたまご1個を飲むことを15年も続けており、しかも70の老体でいつどんな仕事?も仕事にでかけているのです、70の老人が働くのでは、よほど家計が苦しい家だなどと誤解しないでください。大金持ちでもありませんが、それほど困る家庭ではありません。しかし、私の祖父の働くのはほかに理由があるのです。働くことが祖父の生きがい、健康法の一つなのです。このことは祖父自身もそういっています。

また祖母も、盆だ、正月だと年中親せきや知人のところへ出かけております。これも祖母がまだ白い毛が1本もない原因だと思えます。

④このような祖父母が私たちによせる期待の大きさをしみじみ感じ、その責任の大きさを考えずにはおれません。一日も早く二人を安心させてやりたいと思っています。

最後に、私は、私の祖父母を、だれの前でも誇ってやります。努力のかたまりだと。(終)

——指導したこと——

○構想が時間的配列で平凡な感じだ、すなわち

①大正末期、苦心の末洋品店を開いたこと

②二人の子供を失った悲しみ

③現在の元気な姿

④まとめ

となっているが、およそこの四つの部分をどいう順序に並べていったら、最も効果的な構想とってくるのだろうか。型としては、

Ⅱ) 自分たちのことから、祖父母の現状に及び、昔の苦心と悲しみを語る④③①②の型、

Ⅲ) 祖父母の日常生活から過去に遡り、自分たちきょうだいの気持ちを述べる③①②④型、

Ⅳ) 草稿ではまだふじゅうぶんだが、古町を背景にそこに生活を築いてきた祖父母の努力やたくましさを前半に強く表わす①③②④の型。

まだあるが、草稿の型も入れて、こゝでは、だいたい以上四つの型を考えてみた。

草稿の型はどうもありきたりの感をぬぐいきれない。(f)の型だと、きょうだいの意気込みや責任感のようなものが冒頭から紙面に堅苦しく出てくるような感じで味わいが乏しい。さて、(f)の型は草稿に似ているが、①に重点をおいて盛りあげていくなら最も冷静にしかも客観的に描かれ、あたかも色彩豊かな絵巻物のように作られるのではないか。しかしいかながら、それにしても古町の研究がまったくふじゅうぶんでどうにもならない。(f)の型もよく使われる型だが、(f)や(f)よりは、ドラマチックであり、自然そのものより、よりいっそう自然にやわらかく、その上いっくらか立体感も持たせられるような感じに組み立てていけるのではないか、それが最もうってつけの構想といえるのではなからうかと思案した。そこで、これらのあらましを布川に話し、彼からの意見も聞いたうえで、結局③①②④の(f)の型にすることにした。

○さらに、書き出しはもっととっつきやすいようにくふうすること、また、特に①②の叙述にうんと力を入れること。

○表現の粗雑なところや内容のふじゅうぶんなところには注を入れておいたから、自分で考えるなり、祖父から聞き出すなりして直すこと。

○大正時代の古町情調がなんとか入れられないか、調べるには少し時間が足りないから、これも聞き出せたらなるべく書き添えること。

布川に話した内容はだいたいこんな点だが、私が作品に寄せた期待はこうだった。

祖父母を浮き彫りに描写することにより、人間の悲壮美を映し出させてみたい。

粒々辛苦にかく当時古町一の洋品店を築いた努力と喜び、二人の子供を失った大きな悲しみ、老いを忘れ孫の成長に心を砕き家業に励む老夫婦、これらをもととし、大正・昭和の時代の流れ、古町という土地の色を背景にして、子供ながらに、人間の一生を、一編の絵のように描かせてみたいという、やゝ大それた望みを抱いていた。

規模が大きくしかも深みのあるものを、そのためには、古町の姿は、古い記録をあさるなり、また祖父母の描写も、仕事の面だけでなく、若いころのふたりのおもかけを、おばさんや知人をたずねて語ってもらうなどなりさせたいとも考えていた。

期待が大きかっただけに(もっと積極的に細かく事前指導をなすべきだったかもしれない)最初持ってきた5枚には少なからず失望した。背景にしたいと思った古町情調がほとんど出ていない。努力の場面、悲しみの場面いずれも掘り下げが足りない。(子供を失ったところに深くふれていこうとすることはいかにも酷な気もしたけれども)

しかし、あちこち手を加えていくならなんとかまとまったものになるだろう。最初思ったよりは小型になるかもしれないが、とにかくまとめよう。そのためには、前述のように草稿のような構想では平凡だ、同じ素材でもそれでは訴える力が弱い。祖父母の現在の姿、日常のできごとから、やわらかくすらしとはいっていった方がよいのではないか。大正12年……では構想としては平凡であり、また少しかたい感じがするのではないか。読むものの時代的距離感をなるべく減殺するため、現在から過去に遡る回想風の構想が実際には自然にしかもおもしろく感じられるのではないか、最初考えた「悲壮美」も小規模ながらこうした意図の構想の中から多少は醸成されていくのではなからうか、ということで前述のような構想にするよう話し合ったわけである。

二学期も始まっており、時間の余裕もじゅうぶんにはとれそうもなかったので、最初考えた背景

とか、絵のようなどかいう理想像はごはさんにして、とにかく、祖父母を克明に描写するという点に焦点を絞った。

○第8回めの話合い（2回めの添削）

9月初旬、2学期の授業や軌道にのる。

前回、指示された箇所に充分気をつけ、わら紙8枚に書き下してきた。原稿用紙にしたら20枚近い。量費ともに前回はるかに上回る。

次に、第2稿を示すが、同時に添削箇所を書き加えていく。清書は本文とはさらに多少異った部分があったかもしれないがこゝには載せない。なお、3回めの添削をするつもりだったが、私が感冒で3・4日休んでしまったので、最後の仕上げをせず提出させた。

私の祖父母 添注（ ）内は説明

（構想は指示されたとおりにになっていた。書き出しの部分がまだ最初の原稿のようであったが次のように仕上げさせた）

私は、私の祖父母に初めて会った人には、いつもこう聞くことにしている。

「うちのおじちゃんにおばちゃん、いったいいくつぐらいだと思います？」そんなときその人はきまってこう答える。

「そり、50か60ぐらいじゃないんですか。」

すかさず私が、

「残念でした！ 祖父は74、祖母は73ですよ」といって笑う。最初は、だれも私のいうことを信じない。この私にさえ、時々この二人がもうそんな年令とはとりに思えないほど若々しく見えるのだ。私がうっかり、「おばあちゃん、そりせんたくばかりしないで、たまには年よりらしくしていたら……」とでもいおうものなら、

「幸平ちゃん、私はそれほどひま人じゃないからね。あんたみたいな若いもんがごろごろしてないいで勉強でもしたらどうだい。」なんて逆にハッパをかけられてしまっただ。

また、祖父に、

「おじいちゃん、毎日仕事でつかれるでしょう」といえば、

「いや、お前たちを学校を出すまでは私は働かなきゃ」とこれも逆に働くように勧めたようになってしまふ。

祖父はまた、

「お前ら孫三人をりっぱな人間にするまで私は生きなければならない。だから私はだれよりも健康に気をつけている。この私の働くというのは、私の生きがいであり、最良の健康法でもあるのだ。」といふ、自分で自分の生き方に自信をもっている。朝は牛乳1本と生卵1こずつ食べる。こんなことも言う。

「私が働けば、自分が長生きできるだけでなくそのお金はお前たちのために貯金ができるじゃないか。これはまさに十石二鳥だよ。」

まったく、こんなことを言いながら大声で笑う祖父は、魅力的でたくましい。そういう時の祖父の顔は実に生き生きとしている。

（人間の本当に人間らしい魅力というのはこんな時に発揮されるのではないかと思う、と続いている）

たが強すぎるので削る。しかし、会話を豊富にくり入れ、内容は細かく生き生きとしてきている。))

祖母は祖母で忙しい。掃除・洗たく・炊事はもちろん、親せきや知人へのあいさつまわり、それに P. T. A の役員まで引き受け、たびたびの会合にも根気よく出席している。

そして、祖母もテレビの大ファン。テレビで歌謡番組をやっていると、祖父が、「元気のない歌だな。こんな意味のわからん英語で歌われても、われわれのような年よりはさっぱりわからん。こんなもの、どこがいいのかな」などという

「おじいちゃん、これはいまはやりの九ちゃんですよ。この歌は、たしか、えーと、そうそう“上を向いて歩こう。ですよ。これは英語じゃありませんよ。まったく、おじいちゃんは何んにも知らないんだから…。」と祖母にやつつけられる。こんな時は家中おなかをかかえて笑い出す。祖母は、この年令のしかもこんな女性には珍しく、野球や相撲にもくわしく、

「ほら、見ててごらん。この若三杉は、塩をまくとね、その手でまわしをトントンとたたくんだよ。そら、たゞいた。あれがくせだよ。」などと、くせまで覚えこみ、大鷗の大ファンでもある。(まったく気が若いといったらこれほど若い人もちょっとないだろう、と続いていたが、重複的なので削る)

老人とはいえ、二人とも腰も曲らず、目も耳もたしか、なにか読んだり、ひとと話をしたりするのに不自由はちっとも感じない。

老人らしさを少しも見せないが、時としてふっと感慨深そうにこんなことをいうことがある。

(原文は、ふっと思い出すことがしばしばある)

「私ももう老年だなあ。あそこのおばあさんは、先月 73 で死なれたし、75 になる私のいとこも……あゝ私ももう先は長くないな。」じょうだんともつかずそういう祖父の横顔をちらりと一まつのさびしい影が走る。

(原文は、横顔には、ふっといまままで忘れていた 74 年間の深いしわを思わせる影がある)

祖母も、たまに、私がだいぶやせこけた肩をもんでやると、いゝ気持ちそうに目をつむる。その後姿にもやはり 70 の坂を越えた労苦の色が浮かぶ。こんな時、私には「いもがゆ」の主人公無名の五位のようなあわれさ、さびしさがシーンとこみあげてきて、(以下補足) 際限もない寂りょうの世界に連れていかれるような気になる。

(以上で祖父の現況は終わり、次は“布川”ののれんを掲げるにいたる苦心談が、祖父の述懐を中心に、回想的に描かれている。この第 2 段落も次の運命の悲惨を物語る第 3 段落もともに、祖父の懐旧的口述が、文の中核をなしているのが特徴——やゝそれに頼りすぎたきらいはあるが——)

大正 12 年、つまり関東大震災の年の 5 月、まだそれほど発展していなかった新潟に(第 1 回の草稿では冒頭にあった部分、この辺に昔の古町の趣をできるだけ出して欲しかったところ) 洋品店ののれんをさげた二人はまだほんとに若く働きざかりだった。

(中略) 今から考えると、私たちにはとてもできそうもないことを祖父はやってのけたのだ。

「人間は、努力がかんじんだよ。努力しない人間はだめだ。」祖父は彼自身の苦しい生活体験から出たことばをよく私に語る。

(このあとに保険勧誘日本一の原一平氏の努力談が引用されていたが、竹に木をつくの感がわずかながらあったので割愛)

(中略) こうして、祖父は祖母と二人でありつたけの力を出して働き、お金をため、足りない分

は、銀行に、知人に、頭を下げてくめんし、ついに二人っきりの、いや実際は娘二人と四人ではあったが、つまり親子四人以外のだれのものでもない洋品店の旗をあげたのだ。祖父の31才の時である。

(中略、以下、経営の苦心物語が、祖父の口から、原稿用紙で4枚余り続く。草稿の指摘箇所が十分に修正されている。なお、物語の後半の1部を次に載せる)

「美をいうと店を持ったものなかなか思いうるにはいかず、二人でその日の失敗を夜のふけるまで話し、涙の出そうなのをこらえて寝床についたのも一度や二度でなかったよ。こゝはこうしよう、こうすればよかった、そして思案にくれた二人が、ふとわれにかえったとき、自分たちの貧しさ、子供たちのみじめさ、生活のふがいなさをつくづくと感じ、とりつく島もないような気持ちにひたりながら、お互いに励まし合い、明日はもっともうけよう、そしてもっと子供たちの良い親になろうと誓い合ったものだよ。」

努力に加えるにみなみならぬ努力と創意と工夫により、とにかく自分たちの手でこの“布川”のれんをかかげ、しっかりと守りとおしてきたその尊い人生経験に、私は実に学ぶところが大きい。それはきっと、私が祖父母からもらい受けたものの中で最も尊い宝物の一つにちがいない。

(以上第2段落。次は、二人の子供を失う悲惨な段落。この作品には、表現上特別な山といふべきものはない。しいていうなら、第2段落が山の前面であり、第3段落がその背面をなしているといえるだけで、こゝにはいわゆる山の絶頂にもたとえられるべき山といふものはない。わずかに山らしい全体的な高まりがみられるだけである。この辺が作品の不安定を感じさせる原因とも思われる)

しかし、二人の人生は必ずしも楽しく、苦しいながらも幸せだとばかり言えるものでもなかった。

(中略) 昭和20年1月2日、フィリピンで長男戦死の公報がはいったのだ。祖母の話ではその日祖父は用で外出していたのである。祖母は二人の子とだきあって泣いた。おばの話では、その時の祖母の力はあまりにも強く、今でも覚えている、おそろしいともいえるようだったと話したことがある。

(草稿には、祖母の悲しみは描かれていなかった。布川は、指摘されたとおり、祖母に熱心に当時のもようを聞き出したのであろう。私としては、作文としては書いてもらいたかったが、こうしたことにはできるだけ触れたくない、祖父母をいたづらに悲しませてはいけないという気持ちから、実は祖父母に深くわびながら推考させていった部分である)

(中略) ……家へはいつてきた祖父は、いつになく多勢のお客がきているのに驚いたように、「ほり、どうしたんだい。大入満員だな。さて、はらがすいた、母さん、めしのしたくはどうだい」といって腰をおろし新聞を開いたんだよ。それもいつものようにね。そして、私はできるだけおちついているふりに「父さん、おちついてくださいね。わかりますか。正平が、あの子が戦死したんですよ。」そういうとおじいちゃんの顔色がさっと変るのがわかりましたね……………

(こんな調子で、祖母の話が2枚余り続く。次は最後の結びの段落である。草稿はごくあっさりしていた。しかし、筆は強調しないかわりにかなり思いをこめていねいにしめくくる必要があると思った)

しかし、二人はあれほど悲惨な運命にあいながら、それに堪え、なおゆうゆうと生活している。なぜだろう。やはり、私たち三人きょうだいのゆくすえをたしかめたいからだと思ふ。最後の段階

にまで追いこまれながら、私たち三人に期待し、じっと世の流れに逆らい、しがみついているような二人はある意味で超人間的であるといえる。

(中略) 私の気持ちを何か表現するなら、「一生涯、祖父母のように力いっぱい誠実に生きたい」ということだ。

(中略) 最後に、だれの前でも大声で誇りたい。

「祖父・祖母は、努力のかたまりだ」と。そして叫びたい。

「祖父・祖母が、だれよりもだれよりも大好きだ」と。(終)

(実際、第2稿の結びはもっと長く、くわしいものだったが、力強くするためにできるだけ削って簡潔な表現にした。)

以上であるが、添削・推考が予定どおり行ないえなくて、全体的にも部分的にもふじゅうぶんに終ってしまったことは前述のとおりであるが、問題は、構想が予期したほど妥当なものであり、効果的だったといえるかどうかの点にある。全文を載せることができず省略が多いので、判断に苦しまれるとは思いますが、こうした問題について啓蒙的なご批判をいただければこの上もない幸せと考える。同一の材料でも並べ方、組み立てかたによって異なる印象を与えることができる。それは、構想の改変による表現効果の差異という問題になる。

最後に布川の執筆後の感想を1部引用する。

意外という気持ちでいっぱいです。これほど人々に認めていただいた(読売のつくり方コンクール全国佳作入選)のは、これが初めてです。まして私が前から書きたいと思っていたものを好きなだけ書いたのですから……。

最初はわずか5枚の短いものでした。書きたいことはたくさんあったのに筆が進みませんでした。しかし、いろいろ注意されてからは、どんどん原稿用紙に気持ちがのりました。

……自然描写の少しもはいらなかったこと、祖父母だけが中心になり、私たちきょうだいやまわりの人々がさっぱり顔を出していないのは失敗でした。ワキ役不足といったところです。書き出しにも苦心しましたが、とにかくよい経験となり書く自信ができました……。